ふるさとの民話　（第十五話）

『きつね塚の相撲とり』

下町の御陣屋（ごじんや）の付近に、『きつね塚』という、小さな塚があります。

その昔、村の人々の楽しみは、草相撲を見ることでした。どの相撲場にも、たくさんの見物人が、つめよっていました。そのうち、大へん強い力士が現れました。その力士は、羽咋の相撲大会に勝ちました。そして、奥能登の大会にも、勝ちました。七尾の大会にも勝ちました。

しかし、その強い力士は、決していばることもなく、ただ、「わしゃ、下村の寺田でございます。」と名のるだけでした。そして、徳田の大会にだけは、一度も出たことがありませんでした。

やがて、「下村の寺田が出る。」という、うわさが流れると、「その強い力士を、一目見たいものだ。」と、ますます多くの人々が、集まるようになりました。「わあ、また勝ったぞ。下村の寺田は、ほんとに強いわい。」「勝っても、いばらんとこがいいわい。」と、寺田の人気は、高まるばかりでした。人々は、我が子とのように、喜んで寺田を応援しました。

そのうちに、人々は、「寺田という力士は、どんなとこに住んどるんやろ。是非、いっぺん、その家を見たいもんや。」といって、羽咋や奥能登から、わざわざ訪ねてくるようになりました。

「あのう、相撲とりの寺田さんの家は、どこでしょうか。」

「いや、下村には、寺田という家はないがいね。そういえば、前にも、訪ねてきた人がいたが…、寺田さんって、どんな人かいね…。」

「これこれ、しかじかで…。」

「いや、おかしいね…。」

下村の人たちは、訪ねてきた人々の話を聞いて、びっくりしました。下村の人たちは、今までに、寺田という人を見たこともなく、そんな家も見たこともなかったのです。

「そういえば、御陣屋のところに、小さな祠（ほこら）があるでしょう。あそこに、『きつね』が棲んでいるというううわさですよ。」「下村の寺田というのは、あの祠に棲んでいる『きつね』のことではないか。」と、そんなうわさが、ささやかれるようになりました。

それから、下村の人々は、その祠を『きつね塚』と呼ぶようになりました。また、その祠を『相撲とりのきつね様』と呼んで、大事にしたということです。

（下　町　伝承）

→